

現代看護学生の実態と看護技術

——「看護技術」授業の方向——

大柴弘子*

原一寿*

はじめに

- 1 入学時における生活関連動作の自立レベルの実態と実習授業
- 2 生活体験と実習授業
- 3 入学動機の変化と実習授業
 - 1) 入学動機, 志望決定時期の実態
 - 2) 入学から一年後の看護志望意識の変化
- 4 まとめ—「看護技術」授業の方向—

おわりに

はじめに

社会環境を背景にして現代の学生の意識と行動をみると、自己確立の未熟さや退行現象、進路選択のあいまいさなどが指摘され^{1,2,3)}、それらに付随して、留年、ノイローゼ、対人関係障害などが表面化している^{4,5,6)}。そして現在の日本の大学生は、職業的専門的知識の獲得よりも、むしろ教養志向が強く、これは庇護移動規範と極めて整合的であるといわれている⁷⁾。ところで看護学生の場合は、看護専門職に就くことを前提とした学校に入学してくる点で、一般学生とは異っている。しかし、現代の学生一般に共通したあり方を示していることでは、変わりはない。

筆者のみどころ、看護学生の問題は、まず技術実習授業の場面で目につく。近年、看護教育に携わる者は、生活関連動作および対人関係の場面で、学生のような問題をつきつけられ、悩まされており、看護技術教育をどう展開していったらよいか思案することがある。この事は、筆者のみならず看護教育に携わっている者が、共通に痛感していることと思われる。この実態を反映してか、学生の問題および対応策の試みに関する報告が、目立ってきている^{8,9,10)}。

例えば、「看護学生適性検討委員会」の報告は¹¹⁾、今日の看護学生の問題が、社会環境の急速な変化を背景にしており、「本来、人の世話をする専門職業を目指しているにもかかわらず、自分の身のまわりの問題を責任をもって果すことができない状況が、顕在化しつつあるように思われる」とのべている。また、氏家は¹²⁾、看護技術の授業時に学生の変化に気づいたのが、昭和52年度入学の学生からであり、52年、53年頃は「何とまあ」とあ

* 信州大学医療技術短期大学部看護学科

きれ、一つ一つ教えた、とのべている。そして55年度入学生から、日常生活関連動作を洗濯、掃除、食事、裁縫の項目について調査し、その自立レベルを実技テストの評価と関連づけて考察し、教育方法の検討を行っている。

筆者が看護教育に携ったのは、ちょうど昭和52年からであり、それ以前との比較はできないが、ただ学生をみて“昔とは変わった”と感じていた。そして、55年に一年次生の「看護技術」の責任担当になったとき、まず、実態を把握して教育に生かそうと考え、学生の生活背景、気質、および掃除・洗濯・食事に関する生活関連動作について調査を行った。調査は、入学時（初日のガイダンスの時）に行い、その結果を教育展開の参考資料の一つとしてきた。そこで、ここでは当短大看護学科の55年度入学生から60年度までの入学生に行ってきた調査結果を中心に、学生の実態を報告する。また、それらを踏まえて試行錯誤しながら行っている「看護技術」授業の状況（主に一年次生）、ならびに今後の方向について、多少の考察を行い合わせて報告する。

1. 入学時における生活関連動作の自立レベルの実態と実習授業

看護は、患者の日常生活の援助が中心となる。従って、看護者が患者の世話をするときまず自分の日常生活一例えば掃除・洗濯・食事に関すること一の自立レベルが、相手の援助に反映していく。そこで、入学時の学生を対象に、掃除・洗濯・食事（調理・準備・買

表1 看護学生の掃除・洗濯・食事に関する家庭内での実施状況
——看護学科に入学してくるまでの実態——

() 内はパーセント

項目		入学年度		55年度	56年度	57年度	58年度	59年度	60年度
		学生数		80(100)	80(100)	80(100)	80(100)	80(100)	79(100)
掃 除	A+B・a	57	61	62	67	67	54		
	B・b	6) 23	19) 19	18) 18	13) 13	10) 13	22) 25		
	C	17/(28.8)	0/(23.8)	0/(22.5)	0/(16.3)	3/(16.3)	3/(31.6)		
洗 濯	A+B・a	29	32	47	32	36	34		
	B・b	16) 51	38) 48	18) 33	36) 48	30) 44	27) 45		
	C	35/(63.8)	10/(60.0)	15/(41.3)	12/(60.0)	14/(55.0)	18/(57.0)		
食事に 関すること	調理・準備	A+B・a	25	27	43	28	19	24	
		B・b	38) 55	37) 53	28) 37	32) 52	45) 61	38) 55	
		C	17/(68.8)	16/(66.3)	9/(46.3)	20/(65.0)	16/(76.3)	17/(69.6)	
買 物	A+B・a	22	26	37	21	18	21		
	B・b	34) 58	35) 54	28) 43	34) 59	36) 62	31) 58		
	C	24/(72.5)	19/(67.5)	15/(53.8)	25/(73.8)	26/(77.5)	27/(73.4)		
後 片 付	A+B・a						40		
	B・b						31) 39		
	C						8/(49.4)		

注) A 家族全員について— a 責任をもって行っていた b 時々行っていた
B 自分のは— a 自分で行っていた b 時々行っていた
C ほとんど自分のこともやらなかった

物・後片付)の自立状況について調査を行った。その結果は、表1に示した。ここでは、自立状況に焦点を合わせてみていくので、アンケートBのb, C(表1.注)参照)以外の詳細は略す。

55年度のとき、結果をみて“ほとんど自分のこともやらなかった”という人が多いのに疑問を抱いた。しかし、学生に直接聞いてみたら、確かに自分の下着の洗濯も自室の掃除も、自分では行っていないということが分った。念のため56年度からは、事前にその意味で記入するよう説明してから調査した。Bのb“自分のことは時々行っていた”という人は、自立レベルでは、ほとんど行わないのに近いと考えられるので、Cと合わせてみていくことにした。

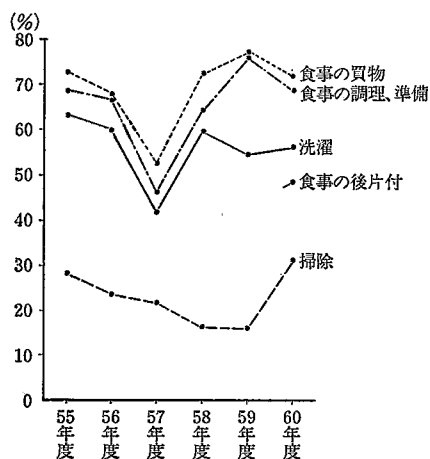


図1 今までの生活の中で、掃除・洗濯・食事に関して、自分のことは時々行っていた、ほとんど自分のこともやらなかったという学生の割合(2つを合せたもの)―表1のグラフ―

その結果、掃除に関しては自室の掃除も、ほとんど自分で行っていない学生が20~30%以上いる。洗濯に関しては、自分の下着も自分で洗わず親まかせという学生が、40~60%以上を占めている。また、食事の調理・準備・買物についても同様、ほとんど親まかせといってよい学生が、およそ40~80%いる。食事の後片付けについても、昭和60年度のみだが約50%の人が行っていない。年度の傾向と各事項についてみると、自立レベルは、生活関連動作のあらゆる事項が並行している。57年度入学生については、やや自立傾向の高いことが目立ち特異であるが(図1参照)、全体的にみて年々生活関連動作の自立レベルは、低下していく傾向がみられる。

機械器具を使う現在の掃除・洗濯は、昔と比べ手を使って絞る・拭く・揉む・擦る・乾す・畳むなどの細やかな動作を必要としない。従って、現代の人々は、それだけ手の動きが退化する。まして、機械器具による掃除・洗濯すら行わない学生が、不器用になるのは当たり前である。食事についても、関わっていないければ、材料の臭い・触感・切る・刻む・揉む・並べるなど手を通しての接触感覚と動きは、訓練されない。また買物を通して得られる経済観念・生活感覚は、養われない。生活様式・環境の変化により、かつての学生と比べ現代の学生は、手を通しての感覚や動きが鈍化し、また不器用になったといえる。従って実習場面でも思いがけない問題が表われる。掃除・洗濯・物品の扱い・後始末など、教師が行って見せ、手を取り共に行いながら指導していかないと、出来ない学生が目立っている。

この実態に対し、55年度からさっそく一年次生には、掃除・洗濯・後始末も授業として位置づけることにした。カリキュラム上では、一年次に「物品の扱い―清掃の仕方」

含む」として、6時間組み入れたのみであるが、実際には実習授業毎の時間延長となった。掃除、洗濯、後始末は、当番と分担をきめて各分担に教師も加わり、指導しながら共に行い、1クールが終了したら、次からは学生だけで行わせるようにした。ところが、学生だけではまずどう分担したらよいか、だれが言いだすのか、どう手を付け始めてよいか、全くできないグループがでてきた。一部の学生達は、清掃ができなくて時間だけ費す。従って教師は様子を見て再び一回目と同様に始める。このくり返しを一年次の間に行っている。また夏休み前と学年末の実習室の大掃除を、これも一年次生の授業の一部として行うことにした。このようにして2年次生になると、学内に限っては、ほぼ自主的に行えるようになる。

一年次生の実習授業では、その度ごと教師は、学生と共に清掃を行っている。体験のない学生は、見習いながら体験していかないと、決して自らはできない。“掃除をなさ”と言われても、何をどう始めたらよいか解らないレベルの人が多い。学生にまかせておいたのでは、何もできないのが現状である。アンケートの結果からみて、当然であることが解った。

2. 生活体験の実態と実習授業

昭和30年代以降の急速な社会変化—なかでも家族型態・生活様式の変化—および医療の近代化は、核家族化、子供数の減少、老人との生活体験の減少、家庭看護の機会や生・死とであらう機会が少なくなった、などが顕著なこととしてでてきた。

昭和59年度入学生80名を対象に、授業のとき、看護技術と関連の深い生活体験の状況についてアンケートを行った(59年7月5日実施、実施者77名)。結果は、表2の如くである。これによると、新生児(生後1ヶ月ぐらい迄とした)を見たことのない人が、21人(27.2%)、死んだ人を見たことのない人が18人(23.4%)、重症の病人を見たことのない

表2 看護学生における生活体験の状況
—昭和59年度学生77人についての結果、欠席者3名、59年7月5日調査—

()内はパーセント

今までの体験事項	あ	る	な	い	備	考
新生児(生後1ヶ月ぐらまで)を見たこと	56	(72.7)	21	(27.3)	※1) ・祖母が入院中2~3時間つきそった ・父が入院のとき一晩つきそった ・母が自宅でねていたとき1~2日用事をたした ・療養中の妹が自宅に外泊のときつきそった 等も含む。	
死んだ人を見たこと	59	(76.6)	18	(23.4)		
重症の病人を見たこと	31	(40.3)	46	(59.7)		
看病をしたこと—入院した病人	11	※1)	55	(71.4)		
自宅での病人	6	22				
入院、自宅共	5	(28.6)				
子守をしたこと—乳児	4	※2)	47	(61.0)	※2) ・従姉妹の子供を2~3時間あずかった ・幼児を1日あずかった ・隣の子供のあそび相手をした 等も含む。	
幼児	17	30				
乳児、幼児共	9	(39.0)				

人が、46人(59.7%)であった。また、看病の体験を病院・自宅に分けて質問した結果は、病院で看病をした体験のある人は11人、自宅で看病をした体験のある人は6人、入院・自宅ともに体験のある人は5人で、合計22人あった。体験内容では、本人が責任をもって家人の看病に当たったという人もあるが、例えば父母・祖父母などの看病で家人が留守のとき、1～2時間世話に当たったとか、母がかぜでねていたので用事をたした、という内容のものも含まれている。これらの体験がないと答えた人達は、全く病人と関わりを持ったことがない人達と考えてよい。そのような学生は、全体で55人(71.4%)である。次に子守の体験について、乳児・幼児とに分けて質問したが、乳児についてのみ子守体験のある人は4人、幼児のみの子守体験のある人は17人、乳児・幼児とも子守体験のある人は9人で、合計30人であった。この内容は、例えば、弟妹に該当者がいて生活を共にした人もいるが、中には従姉妹の子供を2時間程あずかった、隣の子供の遊び相手をしたと、いう人も含まれての人数である。残りの47人(61.0%)は、全く乳幼児と関わった体験のない学生である。

以上から、近年の看護学生のほぼ3～7割以上の人たちが、それまでの約20年間に、人生の生・死に関わる体験、また乳幼児・老人などと関わった体験を持っていない。

これら学生の家族背景について、55年度以降のアンケートから関連する事項についてみておく。まず、核家族世帯の比率と同胞数を表3に示す。55年度から60年度までの、看護学生についてみると、核家族世帯の比率は、およそ58～69%である。同胞数をみると、55年以降の当校の結果からも、2人以下の人が約62～80%以上を占め、同胞数の減少は著しい。表2に表われた生活体験の実態は、核家族世帯の増加と、同胞数の減少傾向という、家族背景も関連しているといえる。

ところで、一年生の臨床実習のとき担当指導者から、“学生はただ黙って立っているだけ”“何にも手が出せない”“こんな学生は今までに始めてだ”といった感想が多く出されたのは、55年、56年であった。臨床に行くとき緊張と恐れを抱いて、極端に患者と関われなくなる学生が目立っているように感じられる。また、学生が“患者さん”と言う時、全く別な特殊な人の如く受けとめていると感じられる場面が目立つ(例えば、一年生の感想文に

表3 看護学生の家族背景—核家族世帯の比率と同胞数—

()内はパーセント

入学年度	55年度	56年度	57年度	58年度	59年度	60年度
項目 学生数	80(100)	80(100)	80(100)	80(100)	80(100)	79(100)
核家族世帯数 (比率)	55(68.8)	50(62.5)	50(62.5)	51(63.8)	46(57.5)	47(59.5)
同胞数 1人	7(8.7)	8(10.0)	3(3.8)	4(5.0)	5(6.3)	7(8.9)
2人	53(66.3)	56(70.0)	59(73.8)	54(67.5)	47(58.8)	42(53.2)
3人	18(22.5)	15(18.8)	17(21.2)	21(26.3)	26(32.5)	29(36.7)
4人	2(2.5)	1(1.2)	1(1.2)	1(1.2)	1(1.2)	1(1.2)
5人	0	0	0	0	1(1.2)	0

「患者さんは、ふつうの人と変わりなく歩いて話していてびっくりした」など)。病人と関わった体験が全くない学生たちは、授業から聞く“病人”“患者”ということばかり、特別なイメージを作りあげていくのかも知れない。“病人”“死んだ人”などと身近な関わりがないと、自分と連続した繋がりのある同質の“人”という実感が持てなくなるのかも知れない。

以上の学生に対しては、知識レベルの学習より体験学習が必要になる。それは、できるだけ実際場面で人との関わりを介した体験学習をさせることが必要である。例えば足浴のとき、洗面器にどのくらいの湯を入れておけば、患者の足を入れたとき湯がこぼれなくてちょうどよいか、という判断は、アルキメデスの原理を知識レベルで充分知っていても、相手と関わりながらの実際体験がないと、スムーズにはできない。また、“水は低い方に流れる”という当然のことについても、容器が傾いて衣類を濡らした失敗をして、始めて次に傾かない安定させる事前の工夫がでてくる。相手への配慮も、関わり場面を通して学び、身につけていく。これらの体験を、ほとんどしていないのが現代の学生たちだといえる。従って、このような学生に必要なことは、相手と関わりながら行為する体験場面を多く持たせることである。そして、指導者は、学生の行為を見ていて学生が失敗体験を経て自ら体得していくのを見守ることから始める、ということが、基礎的看護技術教育の出発点となると考える。しかし、現実には即して教育を展開していくには、どうしたらよいか思案している。

55年度までの学内実習では、学生は看護者・患者役のどちらかの体験実習を行い、後は自学自習にまわっていた。しかし、この方法で学生に自学自習を強制しても、効果的でないと思われた。そこで、56年度からは一年生は80名全員が、実習授業の時間内に看護者・患者役の両方を体験するように展開を組んだ。この展開方法は、当然授業時間の延長という結果になったが、学生のレポート、感想文をみると、以前より効果が表われてきている。

3. 入学動機の変化と実習授業

1) 入学動機、志望決定時期の実態

上記で述べた如く、現在「看護技術」の授業は、規定外に費す授業時間が多い。一回の実習授業の度毎に、平均3～4時間の規定外時間を要している。学生は、この外に実技テストや臨床実習に行く前には、自学自習を行う。一般学部の学生に比べ、看護学生は、カリキュラムにゆとりがないと言われているが、現在の看護学生が技術を体得していくためには、以前の学生よりも一層の努力が必要となり、身心の負担は大きいといえる。このような中で学生が、前向きに取組める状況は、学生の看護への志向が大きく左右するだろう。

まずは、看護学生の入学動機をみておこう。55年度以降、60年度までの学生の入学動機について、表4、表5に示す。表5は、該当する事項3つを選ばせた結果であり(2つ、あるいは4つ選択した者が数名いたため総数が異っている)。表5は、そのうちで最も強い動機となったもの一つを選ばせた結果である。

これによると、最も多いのは“専門職を身につけ自立したい”という者で、表4では30～40%以上を占めている。これに加え、“経済的に安定しているから”“将来家庭に入っても役立つから”という答えは、実利的側面として類似した動機とみてよいだろう。これらは、約半数になる。現代の看護学生に、専門職、経済志向が多いということは、全国医療技術短期大学協議会が調査した結果¹³⁾、昭和54年看護学生の全国調査の結果¹⁴⁾、また看護学生に関する調査研究会の報告¹⁵⁾でも同じ傾向を示している。島村もこのべているが¹⁶⁾、「資格獲得によって安定した生活を確保する手段、と考える看護学生が多くなっている」とみてよい。次に多いのは、奉仕志向で表4からみると、約10～25%ある。次は“自分に適していると思う”者が、約4～19%ある。また、“他人志向・無目的”としてまとめたものが、およそ3～8%ある。

次に、看護婦になる志望決定時期の結果を表6でみると、高校のときの決定がもっとも多い。高校・中学・小学校を合せてみると約70～80%あり、高校までに決めている者が多い。“まだそのつもりになっていない”という者は、約6～15%の割合である。

以上から、生活体験が少なく実利的志向を持って入学してくる学生たちは、掃除・洗濯を含めた実習授業の時間外や延長を、どう受けとめているのだろうか。ことに他人志向・無目的と思われる学生たちは、どう受けとめているのだろうか。この点は、教育上興味あるところだが、個々の追跡を行っていないので、今後の課題としておく。

表4 看護学生の入学動機—最も強いもの1つについて—

() 内はパーセント

項目	入学年度 学生数	55年度	56年度	57年度	58年度	59年度	60年度
		80(100)	80(100)	80(100)	80(100)	80(100)	79(100)
実利志向	専門職を身につけ自立したい	33 (41.3)	35 (43.8)	35 (43.8)	31 ₁ (40.0)	25 ₁ (32.5)	23 ₂ (31.6)
	経済的に独立したい						
志志向	経済的に安定しているから		1 ₁	1 ₁	2 ₂	2 ₂	2 ₂
	将来家庭に入っても役立つから	6 (7.5)	2 ₂ (3.8)	1 ₁ (2.5)	4 ₄ (7.5)	10 ₁₀ (15.0)	2 ₂ (5.1)
奉仕志向	人のために奉仕したい	9 ₉	10 ₁₀	7 ₇	10 ₁₀	4 ₄	7 ₇
	病める人のために働きたい	21	14	18	15	9	14
	社会のために役立ちたい	10 ₂ (26.3)	3 ₁ (17.5)	10 ₁ (22.5)	2 ₃ (18.8)	5 ₀ (11.3)	6 ₁ (17.7)
	看護婦になるのが適していると思う	3 (3.7)	9 (11.3)	9 (11.3)	8 (10.0)	9 (11.3)	15 (19.0)
無他人志向	他大学におちたので	3 ₁	1 ₁	4 ₀	1 ₂	3 ₀	2 ₀
	周囲からのすすめで 何となく	6 ₂ (7.5)	2 ₀ (2.5)	4 ₀ (5.0)	3 ₀ (3.8)	3 ₀ (3.7)	3 ₁ (3.8)
	家族親類に病人がいたから	3 (3.7)	1 (1.2)	4 (5.0)	2 (2.5)	3 (3.7)	0
	小さいときからのあこがれ	0	1 (1.2)	3 (3.7)	1 (1.2)	5 (6.3)	3 (3.8)
	その他	5 (6.3)	0	1 (1.2)	2 (2.5)	2 (2.5)	8 (10.1)
	もっとも強い動機がないもの	3 (3.7)	15 (18.8)	4 (5.0)	11 (13.7)	11 (13.7)	7 (8.9)

表5 看護学生の入学動機—3項目選択—

()内は学生数に対するパーセント

項目	入学年度		55年度	56年度	57年度	58年度	59年度	60年度					
	学生数		80人	80人	80人	80人	80人	79人					
実自 利立 志向	専門職を身につけ自立したい	63	71	59	66	57	63	67	74	65	77	51	60
	経済的に独立したい	8	(88.8)	7	(82.5)	6	(78.8)	7	(92.5)	12	(96.3)	9	(75.9)
志 向	経済的に安定しているから	6	(7.5)	17	(21.3)	11	(13.8)	18	(22.5)	12	(15.0)	19	(24.1)
	将来家庭に入っても役立つから	33	(41.3)	28	(35.0)	25	(31.3)	25	(31.3)	33	(41.3)	31	(39.2)
奉 仕 志 向	人のために奉仕したい	24	61	32	60	37	78	32	67	23	49	18	51
	病める人のために働きたい	24	(76.3)	18	(75.0)	22	(97.5)	18	(83.8)	14	(61.3)	17	(64.6)
	社会のために役立ちたい	13		10		19		17		12		16	
	看護婦になるのが適していると思う	3	(3.8)	19	(23.8)	30	(37.5)	19	(23.8)	29	(36.3)	31	(39.2)
無他 人志 目的 志向	他大学におちたので	13	27	12	27	7	12	9	29	11	25	7	17
	周囲からのすすめで 何となく	12	(33.8)	12	(33.8)	3	(15.0)	18	(36.3)	12	(31.3)	8	(21.5)
	家族親類に病人がいたから	10	(12.5)	9	(11.3)	11	(13.8)	5	(6.3)	10	(12.5)	10	(12.7)
	小さいときからのあこがれ	7	(8.8)	9	(11.3)	6	(7.5)	9	(11.3)	7	(8.8)	10	(12.7)
	その他	7	(8.8)	2	(2.5)	5	(6.3)	4	(5.0)	6	(7.5)	8	(10.1)
	計注)	225		237		241		250		248		237	

注) 1人が2項目あるいは4項目に○印した者が数名いた。

表6 看護婦志望の決定時期について

()内はパーセント

志望決定時期	入学年度		55年度	56年度	57年度	58年度	59年度	60年度						
	学生数		80(100)	80(100)	80(100)	80(100)	80(100)	79(100)						
小 学 校 中 学 校 高 等 学 校	4	55	4	61	6	63	6	62	10	60	7	61		
	7	(68.8)	16	(76.3)	12	(78.8)	11	(77.5)	14	(75.0)	14	(77.2)		
	44		41		45		45		36		40			
医短へ入学してから いつ頃かわからない	9	(11.2)	5	(6.2)	6	(7.5)	4	(5.0)	4	(5.0)	1	(1.3)		
	3	(3.7)	7	(8.7)	1	(1.3)	1	(1.3)	4	(5.0)	4	(5.0)		
まだそのつもりになっていない	11	(13.8)	5	(6.3)	9	(11.2)	12	(15.0)	5	(6.2)	6	(7.6)		
解答なし					1	(1.3)			1	(1.3)				
その他	2	(2.5)	2	(2.5)			1	(1.3)	6	(7.5)	7	(8.9)		
その他の内容	浪人中 養護学校 の試験に おちたと き	1	浪人中	2			浪人中	1	大学在学 中	2	保育園	2	幼稚園	1
									浪人中	2	予備校の とき	2	入学手続 のとき	1
									記入なし	2	2・3ヶ月前 (浪人中)	1		

表7-1 入学時看護婦志望だった学生(51人)の1年後の気持
57年度入学生80名のうち解答者76名について—58年1月12日のアンケート調査より—

項目	人数	理由・備考※	
現在も看護婦を志望している者	28人	※このうち2人は、看護婦を思うと自信がない、大変だ、という但し書きをしている	入学時と変わらず看護職につきたい気持の者
看護婦以外の看護・医療職を希望するようになった者	8人	・進学していろんな資格がほしい(3) ・保健婦を希望する(2) ・養護教諭になりたい(1) ・医療事務か保健婦になりたい(1) ・助産婦になりたい(1)	
"迷っている" "わからない" "前よりその気がうすれている" と答えた者	13人	・自分にやっていけるかどうか自信がなくなった、不安(8) ・自分に向いているか不安(2) ・性格的にあわないと思えてきた(1) ・きびしい(1) ・自分は、不器用でとろいから向かないのではないか(1)	気持が変化した者(23人)
"看護婦になりたくない" "学校をやめたい" と答えた者	2人	・看護婦として働いていく自信がない ・学校が嫌い・講義がだるい、さみしい	
計	51人		

表7-2 入学時看護婦志望でなかった学生(25人)の1年後の気持
57年度入学生80名のうち解答者76名について—58年1月12日のアンケート調査より—

項目	人数	理由・備考※	
現在も看護婦を志望していない者	8人	・別にやりたいことがある(1) ※記述のない者(6) ・看護婦の仕事は大変である(1)	入学時と気持が変わらない者
始めから看護婦以外の看護・医療職を希望していた者	4人	・保健婦希望(1) ・他大学大学部へ行きたかったが不合格だったので保健婦を希望(1) ・養護教諭を希望(2)	
看護婦志望に気持が変わった者	12人	・よい仕事だと思えるようになった(3) ・すばらしい職業だ(1) ・講義、実習を通して看護婦の職業に興味がわいた(1) ・実習やいろいろ学んだことから、看護婦になってもいいと思った(1) ・自分のため家の人のためにもやる気がしてきた(1) ・このままいけば、やるしかない(1) ・やるしかない(1) ・看護婦にならなければいけない気持になってきた、その気で実習しないと無意味だし患者にも悪いと思う(1) ・ここへきた以上、看護婦にならないとすくわれない(1) ・看護婦になれたらそれでいい、他にやりたいものがないから(1)	気持が変化した者(13人)
"現在迷っている" と答えた者	1人	・まだはっきりしないが、看護婦にあこがれている	
計	25人		

ここでみた学生の入学動機の実態は、入学後変化していく可能性がある。教師は、その実態を踏まえて、どう教育していくかが課題になる。

2) 入学から一年後の看護志望意識の変化

看護学生の短大への入学動機は、入学後に変更する可能性がある。ここでは、学生の入学時の看護志望に対する意識が、一年後にどのように変わったかの実態を表7-1、表7-2に示す。これは、57年度入学生の一年後（昭和58年1月12日アンケート調査実施、解答者76名）の実態である¹⁷⁾。

表7-1は、入学時に看護婦志望だった学生（51人）の一年後の気持についてである。これによると、入学時と変わらず現在も看護婦を志望している者は28人いる。この内には、“どういう看護婦になりたい”など将来の夢や希望を書いている者も数名ある一方、“看護婦を思うと自信がない”“大変だ”と、消極的様子がみられる者も2名いた。次に、看護婦以外の医療職を希望する気持に変化した者が、8名いる。理由は“もっと資格がほしい”が3人おり、他は、理由は特に記してないが“保健婦・養護教諭・助産婦志望”などである。次に、入学時は、看護婦志望だったが、現在は、当初の気持に迷いが出てきている者が13人ある。理由は、“自分にやっていけるかどうか自信がなくなった、不安だ”という者が8人、“自分に向いているか不安”という者が2人、あと“性格的に合わない”“きびしい”“自分は不器用でとろいから向かないのではないか”という者が、各々1名ずつあった。迷っている者の理由は、共通して看護婦になることへの自信喪失と不安である。次に、“看護婦になりたくない”“学校をやめたい”という気持に変化した者は2人で、理由は、“自信がない”“学校が嫌い・講義がだるい、さみしい”というものである。

表7-2は、入学時は看護婦志望ではなかった学生（25人）の、一年後の気持についてである。それによると、入学時と変わらず、現在も看護婦を志望していない者は8人いる。理由は、特に記述してない者が6人あり、外は、“別にやりたいことがある”“看護婦の仕事は大変である”と記した者が1名ずつあった。また、入学時と変わらず、“始めから看護婦以外の看護・医療職を希望していた”者が4人いる。理由は、記述してないがその内訳は、保健婦・養護教諭の各々2名ずつである。次に、入学時は、看護婦志望ではなかったが、“現在は看護婦志望に変わった”者が12人いる。理由は、“よい仕事だと思えるようになった”が3人、“すばらしい職業だ”“講義・実習を通して看護婦の職業に興味がわいた”“実習やいろいろ学んだことから看護婦になってもいいと思った”“自分のため家の人のためにもやる気がしてきた”という者が、各々1名ずつある。この他表7-2に示す如く、“ここまでやってきたのだから、やるしかない”という類の者が4人、この外“他にやりたいこともないから”という者も1人いる。また、“現在迷っている”その理由は“まだはっきりしないが、看護婦にあこがれている”というものである。

以上の実態をみて、学生は入学後の一年間に迷いながら、揺れ動きながら気持が変化していることが解る。この迷いは、恐らく学生生活の間続き、その後に確固たる方向に定まっていくものと思われる。モラトリウムが延長し、自立レベルが低い現代の学生たちは、

看護短大へ入学してからの生活で、大きな試練を強いられるとあってよい。学生は、患者への援助場面を通して、しばしば自分自身の問題に直面せざるを得ない。その内から学生は、今までの生活・意識を変える努力をしなければならなくなる。このとき、学生は、自分の職業志向に対する姿勢を自問自答せざるを得ないだろう。学生の入学動機でもっとも多いのは、資格取得、経済志向である。看護専門職に必要なことは、単なる資格・経済志向ではなく、人の世話をすることに意義と喜びを感じる奉仕志向であるといえる。この部分に、看護の職業を志向する基本が根ざしていないと、厳しきや困難にあったとき根本的な迷いになると思われる。

このような学生の状況を踏まえて、とくに一年次生の時期に教育上必要なことは、看護専門職への動機づけだと考える。その動機づけの効果は、学内の授業から得られるよりも臨床現場の内から得られるものが大きい。学生の臨床実習後のレポートに、しばしば書かれていることは、「私もあの看護婦さんになりたい」「私もあのような看護ができるようになりたい」「看護がこんなに素晴らしいと思ったのは初めてだ、この道を選んでよかった」などである。看護教育の基本的なことは、“こうすべき、こうあるべき”を教授することではなく、実際の看護場面を見せることであり、その方がはるかに効果的である。その意味で、教師はもちろん、先輩、指導者のロール・モデル (Role model) の役割は大きい。学生が、志向したくなる看護のイメージが持てるような、教育場面の提供ができることを努力目標にしている。

この一年間の学生の変化は、ある意味では看護教育の評価でもある。

4. まとめ—「看護技術」授業の方向—

看護は人と人との関わりを基に展開していく。看護行為は、対象に対する援助行為であり、援助 (Help) とは、「個人が自分がおかれている状況下で、有能に機能を発揮する能力を妨害するようなものを克服できるようにする何らかの方法 (手段)、または行為」¹⁸⁾と考えられる。看護行為は、看護者の全人格的関わりであるが、その人の手を介して為される場面は多い。主に看護者の手を介しての援助は、「看護技術」の授業科目として、大きな位置を占めて教育されている。

上記でみてきた学生の実態は、講義・筆記テストでは気付かれないが、変化はまず学内の実習および臨床実習の場面においてみられる。実習場面において学生は、手の不器用と同時に、対人関係、全体の状況場面との関わりに変化を表わしている。例えば、相手への配慮の欠如、初歩的な日常のことばかけ、ことば使いができないことから、極度の緊張、ストレス、自己防衛のための無関心・否認と思われるものなどである。これらの変化は、今までみてきた学生の生活実態からある程度納得できる。学生の実態を踏まえて「看護技術」の授業展開は、まず“行ってみせる”“共に行う”“体験させる”を基本にしている。そして、学生には、実際に対象との関わりを通して学ばせることが基本的に必要なことであると考へて努力している。

現在の看護学生は、看護技術を習得していく為に、従来にも増して努力が必要である。教師側も、学生の質的变化をふまえて目標レベルを保つべく、規定外授業時間を増さざるを得ないのが現状である。実習授業展開は、まず実際場面を通して体験学習の機会をどう作っていくかが課題である。例えば、学内での体験学習には限界がある。学内で80名の学生実習は、学生同志のシュミレーションモデルで行う方法以外ではでむずかしい。学内で熱心な学生ほど、現場で混乱し、戸惑う事例にであうが、生活体験の少ない学生にとっては、実習体験が実際に即したものになりにくいからだと思う。かつての看護学生は、“見習い実習”というものがあつた。じゃまにならないように、手伝える範囲の雑用をやらせてもらいながら、看護者の後について見て廻っていた。異論はあるにしても、基本的には、このような教育が現在の看護学生にとっては、とくに必要な要素の一つであると考えられる。しかし、この場合も80名の学生の展開方法と時間に問題が生ずる。

学生の実態をみて、教育目標（看護専門職に就く人を教育すること）、学生数、看護教師数が現状のままで進められていく限り、卒業時看護学生の質的レベルダウンは、避けられないだろう。期定外の授業時間延長を続けることには、限界がある。看護専門家を教育するためには、かつての学生の状況とは質的に異ってきている実態をふまえて教育にあたらないと、看護の質的低下を招くことは明らかである。看護専門家になる為には、単なる資格取得、経済志向だけでは適さない。

社会病理現象が顕著になっている現在、治療・予防・健康増進のあらゆる場面に、より良い看護専門家が必要とされる時代である。現代の看護学生の、入学後の看護専門教育において教育する側の責任は大きい。

おわりに

最近、「看護技術」の実習授業の場面で思案し、模索している。ここでは、現在の看護学生の実態報告と、補足的に「看護技術」授業展開の現状、および私見をのべた。看護短大教育の本質論とも関わりながら、実習授業の内容、展開の工夫、そして評価をしていくことが今後の課題である。

注（参考文献）

- 1) 村瀬孝雄：現代学生における自己確立の諸相・退行しながらの自己確立、キャンパスの症状群 p.3-31. p.209-231. 弘文堂、1982.
- 2) 鳴澤 實：退行一胎内回帰願望、大学と学生、207号、p.16-17、文部省、1983.
- 3) 唄中 達：進路選択のあいまいさ、大学と学生、207号、p.14-15、文部省、1983.
- 4) 土川隆史：学生相談の中で見られる現代学生像、大学と学生、207号、p.18-19、文部省、1983.
- 5) 安藤延男：最近の留年問題に関する一考察、大学と学生、204号、p.7-13、文部省、1983.
- 6) 石井完一郎：学生の自殺に取組んで、大学と学生、207号、p.7-11、文部省、1983.
- 7) 丸山文裕：社会構造と大学生の教育観、現代のエスプリ、No.213、p.127、至文堂、1985.

- 8) ———：特集，看護学校入学者の傾向と教師の対策，看護展望，Vol. 10, No. 5, p. 466-491, 1985.
- 9) ———：小特集，学生とのかかわりを考える，看護教育，Vol. 25, No. 11, p. 661-678, 1984.
- 10) 岡田洋子他：学生の今日的特徴と教員の教育的かかわり，看護教育，Vol. 25, No. 11. p. 665-673, 1984.
- 11) 島村忠義：全国調査からみた現代看護学生気質，看護展望，Vol. 10, No. 5, p. 11 (475)，メヂカルフレンド社，1985.
- 12) 氏家幸子：看護学生にみる生活関連動作と看護技術，看護展望，Vol 10, No. 5, p. 19-20(483-484)，メヂカルフレンド社，1985.
- 13) ———：全国々立医療技術短期大学部第三学年次進路希望に関する調査報告，全国医短協会，1980.
- 14) 島村忠義：前掲書，p. 13 (477).
- 15) 伊藤暁子他：看護学生の生活と看護教育に対する考え方，看護実践の科学，Vol. 10, No. 3, p. 22, 1985.
- 16) 島村忠義：前掲書，p. 12 (476).
- 17) このアンケートは，58年3月に卒業した学生の下山里恵子・久保田裕子・山田喜代子が，3年次生の時卒業研究で行ったものである。その結果は，看護婦志望の有無と u. p. 1 (University personal inventory) との関係进行分析するために使用し，ここで報告する内容についての分析は行わなかった。学生の研究は，筆者が指導し共同で行ったが，学生へのアンケートは，直接学生たちで行ったため教師が行ったものより学生の本心が表出されていたと感じられた。学生の行った研究は，「信大看護学生の精神衛生」のテーマで学生研究集録（信州大学医療技術短期大学看護学科，1982）に報告した。
- 18) E. ウィーデンバック，外口，池田訳：臨床看護の本質—患者援助の技術—，p. 143，現代社，1979.

(1985年9月30日 受付)